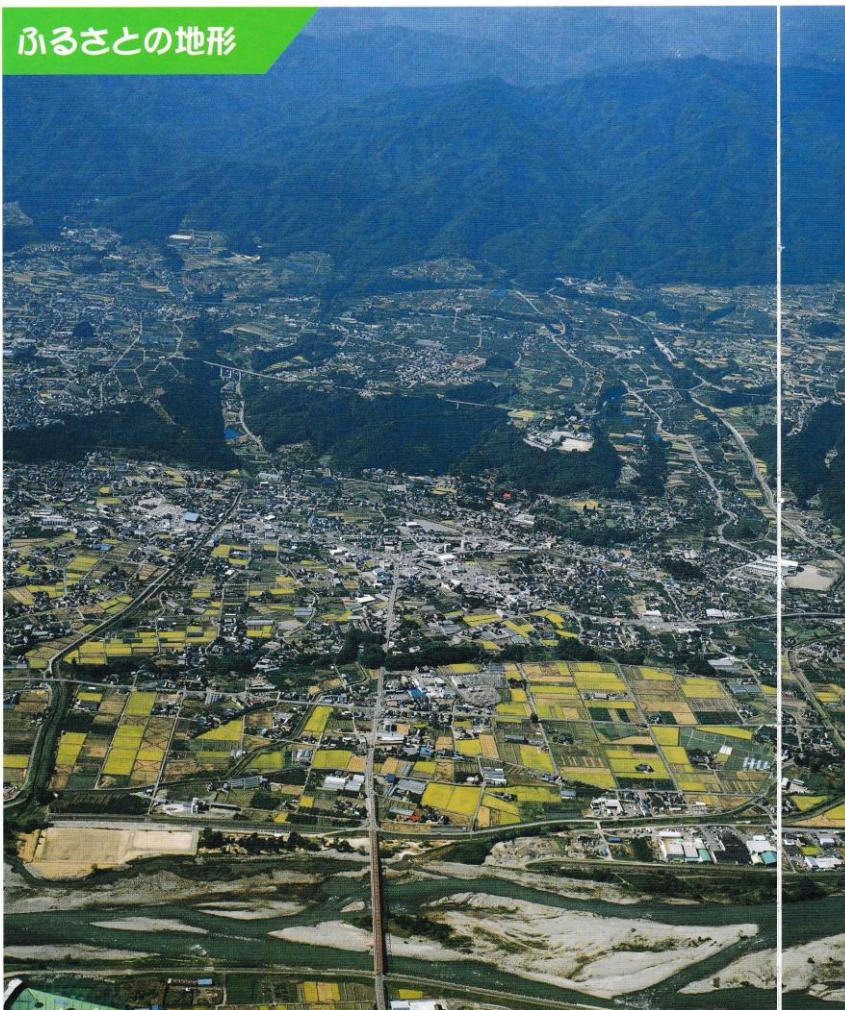


ふるさとの地形



喬木村上空より、西方の座光寺を望む（2008年9月23日撮影）



光寺天守は天竜川（標高400m）から、座光寺富士（標高1270m）にわたって広がっています。その標高差は約870m、人の居住地と農耕地は天竜川から大門原山部や一本杉（標高700m）まで、標高差は300mほどです。この間は最大4つ面から成り、それぞれの間に断層崖と段丘崖が隔てています。最上段は江戸時代に拓かれた。最下段は江戸時代の石川郡等の建設によって耕地となりました。その間に繩文時代、古墳時代を通して多くの文化が花開いた地域でした。

座光寺と特徴付ける断層崖

座光寺の人々が住む生活地域は断層崖によって隔てられています。一番大きなものが南本城南面の見晴山断層がつくる崖です。

この断層崖は1960年代の高度経済成長期までは里山として人々の生活と強く結びついていました。現在は野生の動植物の様みかとして、“緑の回廊”をつくっています。森林性の生物が生活したり、移動したりしているところです。例えば、昆虫のカワガタムシ、カブトムシが多く、鳥のシジュウカラ、カケスなどの巣場・採餌場所になっています。さらに希少種のササユリやカザグリの生育地でもあります。

昔の人は住むところをどのように選んだ？

大堤団地付近には低いところに人の住居跡が発見されています。事件に当てはまるところでした。

恒川清水を中心とした座光寺の中段は、これらの条件がぴったりと当てはまりました。最下段の天竜川はしばしば氾濫して、不安定な土地だったでしょう。南大島川と土曾川の氾濫は限られた範囲だけでした。かなり下流まで両側の山に挟まれていたからです。北側に南本城の山を背負い、なだらかな南東に向いた傾斜。そして清水がありました。食べ物は天竜川で魚が獲れたはずです。当時は川幅も広く、沼地もあったでしょう。ウナギのぼりっていました。木の実はクリ、オニグルミ、どんぐり、ツノハシバミなどが採れたはずです。

この頃の宮崎、原地籍はまだ山林に覆わっていて、狩や木の実の採取地だったと思われます。

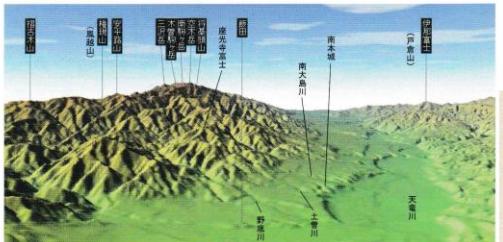
私たちの座光寺はどのようにできました？

私たちの住んでいる座光寺は伊那谷の中でも、早くから開けたところです。多くの土器の出土、古墳そして伊那郡衙がつくられたことからもそのことは伺えます。繩文時代から古墳時代を通じてなぜ座光寺が栄えたのでしょうか。そのことを地形から考えてみましょう。

日本列島から座光寺をみる

日本列島は地球の表面を覆うプレートと呼ばれる板状構造によって古生代末から新生代に造られました。このプレートはその下のマントルが対流しているために少しずつ動いています。日本付近には4つのプレートがあります。中央アルプスや座光寺はこのうちのユーラシアプレートの東縫に乘っていて、その下に東から太平洋プレートが、南東からフィリピン海プレートが移動してきて沈み込んでいます。プレートの接するところでは表面にある地殻が造山運動、断層、地震などさまざまな変動を引き起します。3,000m級の山脈や日本海溝の8,000mもの深い海底の溝もその例です。また南アルプス各地にある石灰岩やチャートはプレートに載って太平洋方面から運ばれました。

座光寺は中央アルプスのふもとにある



座光寺の地形の模式図
飯田市松尾・飯田女子短大上空1000mより北方をみる。(カシミールによる)
座光寺は天竜川から座光寺富士の少し奥まで。南と西側は上郷、北は高森町に接する。北側の南島川と南の土曾川はほぼ直線で山から下る。人々の住むところは階段状の断崖懐で寸断されている。

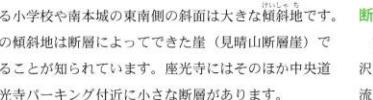
The diagram illustrates the tectonic setting of the Nankai Trough. It shows the 'Central Alps' (中央アルプス) and 'Nankai Shikoku Thrust Zone' (南紀山系断層帯) dipping beneath the 'Eurasian Plate' (ユーラシアプレート). The 'Westward Thrust Pressure' (東西から押す圧力) is indicated by arrows. The 'Kinsenkyo Fault' (見晴山断層) and 'Kanshōji Temple Site' (元善寺寺面) are labeled. The 'Pacific Ocean' (日本海溝) is shown to the east.

す。そのとき断層ができました。
中央アルプスをつくった断層は南北に長く延びています。
た。山頂付近は激しい浸食によって断層崖は分らなくな
りましたが、山がいくつも連なった山脈をつくりま
す。山麓には明瞭な断層崖が残っています。この結果山
と平行に断層があり、断層によってできた断層崖、さ
くに山脈の両側の天竜川や木曾川が平行することになり
ました。

座光寺はこの中央アルプスの南東端にあり、断層崖が
地域の形をつくりっています。また座光寺の山は花崗岩で
できています。

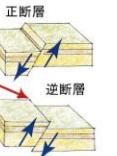
東光寺で断層を探す

座光寺の人の住んでいるところは上段、中段、下段と
きく3つに分かれています。とりわけ上段と中段を分



くだんそう しょうこ 断層の証拠

断層は南北に連
っていますから、
光寺の地形は南
に走る平面を西
上段、東に下段
断層が断ち切つ
います。



南本城の断層は逆断層だったと思われます。その証拠せんげん頭で崖の肩の部分が傾斜よりも高くなっています。南本城の本曲輪もこの地形を利用し高くなっています。2008年の本曲輪の発掘(トレンチ)では盛土はほとんどしていないことがわかりました。北城跡や耕雲寺付近が平らになっているのは断層上面のものと思われます。

「平らな部分があつて崖がある」この階段のような地形
人々の生活に大きく関わってきました。とりわけ明治
後、飯田の町が栄えるようになると、道路は飯田に向
って発達しました。そのために座光寺の中の上下を結
ぶ道は貧弱なものになりました。



書は比較的新しい

本城の両側にある並木
西の沢は奥行きが短く、
が急です。これはでき
らあまり年月が経って



いことを示しています。谷は時間が経つほど奥深く、川の流れは緩やかになるからです。その様子を図ました。



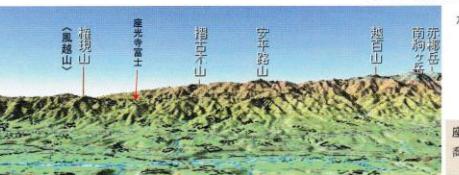
高森町宮沢から南の座光寺小学校を見る。小学校の面は平らだが、東側斜面は断層崖である。

④ 地形

央アルプスが南アルプスより後に隆起したことと急
降起了ために、流れ出る川がつくれた扇状地が
川を東に追いやりました。伊那谷で天竜川の西に開
ところが多いのはそのためです。座光寺付近でも商
より、座光寺側の平野部が広くなっています。

た山から流れ出る川がまっすぐ東に流れ、天竜川に
に注ぎ込んでいます。そのため断層崖を直角に断ち
形をしています。これが田切地形です。

大島川、土曾川は与田切川に比べると小さいが、田形をしています。また下部に小さながらも扇状地ります。



光寺と中央アルプス
木村氏乗上空1200mより西方をみる。
(カシミールによる)

清水の分布の意味するもの

座光寺にはいくつかの清水・湧水が分布しています。現在のように水道が無かった時代、人々は清水や井戸の水を使って生活していました。井戸を掘る技術が無かった時代は、清水や川の水を使っていたのです。

現在の清水の分布を調べることによって、昔の人たちの生活や地形の成り立ちを推し計ることができます。

座光寺村史の基礎資料

平成5年発行の座光寺村史をつくるにあたって、さまざまな基礎調査が行われました。その中の一つに塙沢仁治さん・棚田芳雄さん等による「座光寺の湧水」調査がありました。1980年頃のことです。この調査は座光寺村史に載っています。

座光寺の清水の分布

- 潜れている
- わずかに出ている
- 良く出ている



調査の結果、湧えたもの、梅雨の頃だけ出るものなどが多くありました。使わない水が湧くのは井戸と同じです。最下段の段丘崖下(白山下など)にはたくさん清水があって、直線状に並んでいます。これらの清水は南大島川の扇状地の末端に沿ったと思われます。恒川清水一带は土曾川との複合扇状地かも知れません。また河原面の水田に温泉が多いのもそのためでしょう。

その調査基礎資料を使って、改めて清水の調査をしました。その結果、地域の自然が見えてきました。また当時に記録されなかった清水が少しありました。

清水と人々の生活

座光寺に上水道が普及するまでは井戸や清水を使っていました。井戸が使われはじめたのはいつ頃かわからいませんが、それまでは清水や川の水を使っていたはずです。

清水の周囲には人々の生活がありました。

その典型的な例が恒川清水（図中番号21）です。恒川を中心に伊那郡衙が造られるほど



恒川清水（図中番号21：以下同じ）バイパス道路が通るまでは水量が豊富だったといい。またこの清水があったことによって付近に伊那郡衙が造られたという説があります。

でした。

また、湧水地から暗渠で導水し、住宅地に水の出口を作ったところもいくつかあります。図の17や26、33bはその例です。

水道を使うようになってから、清水は急速に荒れてきました。井戸と同じく水道が細くなるのです。今回の調査でいくつかの清水は所在地が分らなくなっていました。道路工事で潤れたものもありました（21他）。

清水や湿地付近には古墳がある

大堤团地の下の棚田勝久さん宅の清水（11）付近からは大量の“つぼ”的貝殻が出土しました。貝塚があったのです。

つぼとはタニシのこと。タニシは常時水に浸かっている沼や池にいる種類ですから、その場所に池のようものがいたに違ひありません。貝塚の北側の丘には住居

跡が出土しました。水はけのいいところに住んで、近くに清水がある。さらに食べ物のつぼが獲れれば、住むには申し分のないところだったでしょう。



佐々木さん宅の清水（22）現在も豊富な水ができる季節によって細くなる。その水を使ってコイが飼われています。

白山下の清水群

36～48はたくさんの清水が連なっていて、正確な数はわかりません。これは南大島川・土曾川扇状地の末端で伏流水が出ているのでしょうか。また天竜川の氾濫原が欠野や清水地区の下まで広がっていると思われます。



最下段の清水 白山下などの段丘崖の最下段には写真のような湧水がたくさんあります。

清水にまつわる言い伝え

17の清水は「古瀬清水」と呼ばれていました。江戸時代から豊かな水量を誇り、水源は西方200m以上の所と思われ、出口には横穴が作られていました。長い距離の穴を掘って、水路をつくるのは重機が無かった時代は大変な作業だったにちがいありません。そのようなことをしても水を確保する。それだけ大事なものだったのです。

他の清水では秋になると菜洗いに近所の主婦が集まってきたという言い伝えがたくさんあります。



古瀬清水（17）今村善興氏宅水門。山腹を開いて、水を引いてきた出口。江戸末期・元治元年に作られました。



水神様（33b）この水は地下の水路を通って河原集落まで引かれた。水神のところには湧き出ています。しかし水に助かれた人たちは「水神様」を造り、祀りました。



八丁地清水（28）かつては水量が豊富で、小学校に通学する子供の憩いの場所として、親しまれていました。現在は源れて牧野隆夫さん宅の駐車場脇に、梅雨時に出るだけです。



山神の清水（36：高岡野）現在も豊富な水が出ています。この水は水田に使われています。付近には水量の多い清水が多く、おそらく南大島川の水が伏流水して、扇状地末端に湧出しているのでしょうか。



五郎田の清水（31）共和地区にある五郎田の清水は現在、写真のようになっていて、ポンプを使って、中羽根地区の数軒で使っています。以前の使われ方には次のような言葉や記録があります。「戦前は7月14日に清水の大掃除をして、回り当番でお祭りをした」「清け菜洗いに多くの人が利用していた。洗いながら、いろいろな話ができ、とても楽しく、勉強ができた」「上郷駅の人も菜洗いに来た。」

（小林正明）